

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.5
2004.11

目次

学院史資料室写真集 4	1
創立120周年を迎えて	2
オール関東学院フェアの開催について	8
資料・情報提供のお願い	10
学院史資料の紹介	11
編集後記	12



学院史資料室写真集 4 横浜バプテスト神学校

関東学院の源流の一つである横浜バプテスト神学校は1884（明治17）年10月6日に創立された。今から120年前のことである。
写真の年代は特定できないが、写真に「山手75番地」とあり、この記載が正しければ、神学校の創立から少なくとも2年は経過していると言えよう。なぜなら、神学校創立当初は山手64番地の土地と家屋を借りており、その2年後から山手75番地のアメリカ・バプテスト・ミッションの敷地を使い始めたからである。^①
外国人居留地の山手75番地には1873（明治6）年3月に「横浜第一浸礼教会」^②が設立され、横浜バプテスト神学校へ至る道を迎えることができる。
現在、「山手75番地」近くの横浜市中区元町の代官坂登り口には「日本バプテスト発祥の碑」^③が建っている。

① 『関東学院百年史』p161、461。
② 現在の日本バプテスト横浜教会。日本人居住地区への教会の移転進出の方針の下に、1923（大正12）年8月に横浜市中区寿町に移転し、現在に至っている。
③ 碑の表には「明治六年二月七日ネーサンブラウン博士来朝此ノ地ニ布教本據（據？）ヲ置ク」、裏には「昭和十六年九月二十三日建之日本バプテスト基督教會」と彫られている。

埋もれる史料の行方

2003（平成15）年12月竣工した金沢八景キャンパス1号館への事務室移転により搬出された膨大な保管書類は、まだ光を見ない学院史に係る史料と共に、とりあえず11号館及び金沢文庫キャンパス野球場の仮倉庫に保管している。三春台では中高史料室の事情で保管資料等が整理されたと聞く。女子短期大学改組に伴う人間環境学部設置の際も同じような状況が生じている。それらの史料の行方が気掛かりである。

今回1号館への慌しい移転作業の最中、事務室の片隅に積んである本の束が気に入り、手に取って見ているうちに『日本新教史の研究』（片子沢千代松著1957ナツメ社）が紛れているのを見つけた。辛うじて廃棄物になる前に救い出すことができた。今までにも似たような経験をされた方が多いのではないかと思ひ、拾い上げた本について少し触れておきたくなった。『日本新教史の研究』は故片子沢千代松中高教諭の著



『日本新教史の研究』— 新教百年の歴史を概観

書である。古代オリエント研究の三笠宮崇仁殿下による「序」を擁し、敗戦後間もない1947（昭和22）年に発表した「日本基督教の世界的使命」の小品を含む。「あとがき」には、いまはもう懐かしい「基督教の日本知らず、神道の世界知らず」の言葉も見え、日本プロテスタント史を語って雄渾である。片子沢先生は、「キリスト教史学会」を1949（昭和24）年に創立し発展させた一人で、日本プロテスタント史に関する研究の開拓者として知られている。1957（昭和32）年に創設された学院の日本プロテスタント史研究所（キリスト教と文化研究所に継承）にも尽力されている。また『関東学院百年史』の編集主任として、百年史の約半分にあたる創立から終戦までを執筆し、関東学院の形成には三つの源流があること、それが断絶することなく継続していることを片言隻句の史料をも駆使して明示している。先生は1991（平成3）年1月横須賀の病院で亡くなられた。享年80歳であった。江口欣宏

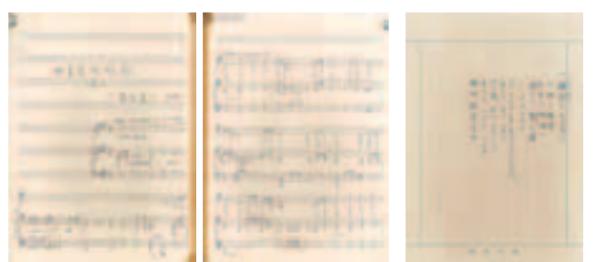
「学院歌」に関する史料の周辺

学院創立100周年記念に際し、当時の神奈川新聞は「人になれ 奉仕せよ」の標語で特集記事を10回に亘り連載している。創立から戦前・戦後の苦難な時代を経て第二世紀へと繋いで来た経緯が実に手際よく纏められている。連載の最後の項には、記念事業の一環として学内公募により選抜された歌詞が新応援歌「相模の東」として、寺内タケシ氏の作曲により誕生したことが記されている。

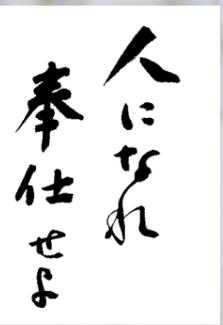
例えば1966（昭和41）年5月「関東学院開学80周年記念式典」が横浜文化体育館で挙行された際に、これを記念して「学院歌」が作られている。故相川高秋教授の作詞で、著名な作曲家高木東六氏の作曲によるものである。『関東学院百年史』にはわずか2行の記述があるばかりで、学院歌誕生のいきさつは未だに判然としない。

最近、「高木東六・百歳記念コンサート」の実行委員会の方に会う機会があり、学院歌の作曲者という縁でコンサート成功のためにささやかな協力をさせて頂いたことがある。これを契機に学院歌に係る空白を埋めるべく、学院史資料室に煩瑣な調査をお願いしたところ、しばら

くして同資料室の書庫の奥に大切に保管されていた高木氏の楽譜と相川先生の歌詞が、セットでしかも直筆原稿で見つかるという思わぬ収穫があった。歌詞の冒頭は確かに巍然（ぎぜん）とあり、毅然（きぜん）ではない。心浮き立つような巧みな旋律は「創業の熱情」に相応しく豊かで力強いものがある。コンサートの記念誌には本学院の頁があり、高木氏独特のサインが入った直筆楽譜の一部を登載することができた。（y・ε）



高木東六氏の直筆楽譜と相川高秋先生の直筆歌詞。（部分）



編集後記

2004年10月6日、関東学院は120周年を迎えました。1984年、創立百周年記念事業の一つとして『関東学院百年史』が編纂・発行されました。125周年の2009年には、その記念史が発行される予定です。今回の号は、その一助になればとの願いを込めて編集いたしました。この年は、ちょうど横浜開港150周年の年にあたります。横浜港の近くには関東学院発祥の地があり、またその近くに120周年の本年、KGU 関内メディアセンターが開設されました。このことは関東学院の歴史にとって大きな意義があります。
今後もこの『ニュース・レター』を通して、学院の歴史資料を後世に遺してゆきたいと願っています。関係各位の一層のご支援とご協力を衷心からお願い申し上げます。学院史資料室長 瀬沼達也

関東学院 校訓

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第5号 発行日 2004（平成16）年11月15日

発行人 関東学院 学院長 松本昌子

編集 関東学院 学院史資料室

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7049 FAX. 045-786-7862



創立120周年を迎えて

創立120年を振り返る

理事長 内藤 幸穂

1. 転換期

最近、循環型社会という言葉がやたらに目に付くが、その言葉に素直に関心と理解を示す学生が少ない。もっと有体に言えば反感を示す学生もいる。彼らの反発は、伝え手としてのこちら側に技術的な問題点があるのかもしれない。転換期に立ち会い、それをよい方向に進めようとする態度が不足しているのかもしれない。そうした反省を棚にあげて、自らの言葉がある質量をもって相手の胸に届くと思ひこむことは、その言葉を構成する理屈が正しいことを当然の前提としている思い込みが、我々にあるからであろう。

我々日本人にとって、近現代史上もっとも大きな転換期といえば、60年近い過去にあった敗戦、およびそこから始まる戦後という時代であろう。そして敗戦後の多くの日本人の身の処し方、いわば「変わり身の早さ」それ自体の中に、現在日本が直面している数多い困難が潜んでいると考えられる。あの急激な転換の果てに、多くの日本人の心象に深く根差してきたものは、自他に対する信頼よりもむしろ不信ではなかったかとの疑念にかられる。膨大な数の死者を記憶にかかえたままの「変わり身の早さ」に自ら驚きを感じないわけにはいかない。昨今のイラク戦争を見れば、特にその感にかられる。忘却は人の常としても、軍国主義から民主主義への転換は、その根底にある虚無感を生まざるを得なかったのだろう。そして、その虚無感の堆積こそが、今日に至る疾病のごとき経済至上主義・成果主義へと所を変えてきたと見るべきであろう。

時代が大きく転換するとき、それまでの在り方に深く思いを至し、時代の流れに棹さすという現象は、無視することができない。忘れ去ることのまずい人、のりかえることの手先人ほど、新しい時代にあっては否定の対象になりやすい。責任感や当事者意識さえも正当な評価を与えられず、否定されるとなれば、その思いは時代の底に、歪みとしてひそむことになろう。それ故に、本当の変換とは否定によって全うされるのではなくして、克服によってなされることになろう。

2. 新自由主義への変革

今、我々の学校は時代の歪みをまともにうけて

いる。費用効果への無関心、年功序列へのこだわり、終身雇用制度への執着が、受験生の減少、在校生のドロップアウトと重なれば、歪みは学校の存続につながることは論をまたない。それであるのに、学校は旧来の温床を守り続け、新しい挑戦は毛嫌いされる。これでは、組織の中で最も安住の地といわれた学校経営もいよいよ終わりを告げる日を早晚迎えることになろう。構造改革と称しながら、古い壁がどうしても打ち破れない。教養を身につけさせることは必須の要件だが、そうかといって、何時迄も教養課程の存在に固執する考えは、現在のように時代変化の激しさと共生できないからだろう。現在の世界競争に打ち勝つには、企業が即戦力としてほしがっている人材を世に送り出すことである。さすれば、大学授業の中心は英語会話・コンピュータ・簿記会計の3点に絞った実学を教え込むことを忘れてはならない。母校に残って教員になろうという人々には需要と供給の嵐の中で戦っていくしかない。次の課題は、大学院と小学校だろう。私学の大学院は基本的に採算性が優れていないのだから、国立大学株式会社におまかせしておくしかあるまい。一人の教授に30人もの大学院生が集まるような大量生産型大学院は組織そのものを変革せねばなるまい。中高に問題がないとは思わないが、私学強化策には工夫の余地がいくらかあるように思う。大学はまさに『京の着倒れ、大阪の食い倒れ』に近いのだから、まさに根本的に改革を迫られている筈なのだが、旧態依然たる大学はそれに類した危機感がない。

デビット・ヒュームは、キリスト教を含めて、宗教の根源の探求に生涯を費やした。宗教を始めるには、どうしても奇蹟が必要である。奇蹟をもたない宗教は、気の抜けたサイダーのようなもの



本学源流の一つである東京学院。
写真は東京学院における日曜学校のグループ。

で味が悪く、庶民は集まってこない。人間が存在することが、ある意味では奇蹟であり、宗教者が宣伝する奇蹟に過ぎないとヒュームは信じていた。自然宗教に関する対話は、ヒュームの死後に人目にとまったが、対話書出版の面倒を生前に頼まれた友人のアダム・スミスは、身の危険を感じて、この依頼を断ったそうだ。果てしない宗教戦争を察知して論争に介入しなかったヒュームのこの判断が一貫して踏襲されてさえいれば、現在のような混乱は生じなかったであろう。「保守的であると同時に革新的でもある」とするアメリカン・スタンダードは確実に存在する。近代ヨーロッパの啓蒙主義につらなる自由主義の理念がそれであるが、アメリカ例外主義が本当に成り立ちうるものかどうか。封建制度を支えた態度が進化の過程で復活する可能性はあるのだから、制度の進化とは、決して古い制度の完全な消滅ではなく、新しい制度が古い物の上に累積して行くことなのである。さすれば、今日我々が問題としている構造改革そのものも、保守と革新といった隔たりのなかにあるのではなく、古き時代に栄えた伝統にさらに磨きをかけるものでなければなるまい。

経験論の元祖、ロックが生きていた17世紀、英国教会へのお布施の総額は、今の貨幣価値からすると、1兆円を越えて独占大企業であった。当時の学生の多くは、その僧職になるために、オックス・ブリッジをねらった。18世紀の初頭、アメリカという英国の植民地での最優秀校イエール大学でも、学問の中心は神学であった。つまり牧師になれば立派に飯が食えたのである。大学を出たら教わったことが飯の種にならなければ、大学の存在価値はなかったのである。現在の学生は何故かその大学の教授になりたがる。卒業した大学の教授になるしか学問の価値がなくなったのだろうか。私学の王者は、最近他大学卒業の学生に教員への道を与えないようだ。雲の中に入ったら、その雲の形は分からないのと同じで、ある組織に生きている人は、その組織の臭いしか知らない。事務を担当する人々までが同様だとすると、仲良しクラブは栄えても、世界と戦える戦士は生まれぬ。

3. ここ20年の動向

本を見つけて読むということは、何か運命的なものがあるように感じる。ある意味では読書は人生そのものかもしれない。ショペンハウエル(1788



本学源流の一つである中学関東学院。写真は本校舎を普門院の階段から見上げたもの。1921(大正10)年頃か。

～1860)の『意思と表象としての世界』の第一巻の序文で、「この本は装填がいいから、もし購入してくれたら、本棚の透き間を塞ぐのに好適である。」と皮肉交じりに書き始めている。巻末では、カント哲学を痛烈に批判している。そのお陰で、と言うとお叱りを受けるかもしれないが、第一版(700冊)は殆ど売れなかったそうだ。ジョン・オックスフォードは、この事実を取り上げてイギリスの雑誌に批評を載せ、それがやがてドイツ語に訳されてドイツの雑誌に載った。ドイツ人は、基本的にイギリス人に弱味を持っているため、ショペンハウエルは一夜にして有名をはせたというから、やはり本には運命的なところがあると思わずにはいられない。と同時に本の売れる時代背景が、大きなインパクトになる。ショペンハウエルが有名をはせたのが19世紀の前半だとすると、ナポレオンの最盛期と重なるから、欧州はいろいろな花が咲き誇っていたであろう。そのような花が麗しい香りを欧州全土に潤して、時代の差をこえて著名な作家を生み出し、欧州の気風は時代の波にもまれながら、多くの読者を魅了していった。

ここ20年は二つのディケードにまたがった世紀の変わり目にあるのだから、何か特記するようなことがあるのではないかとしばしば尋ねられるが、私事ながら『星の王子様』がベストセラーに録されても、著者の努力以外に特別な動機は見出せないように感じられる。しかし、印税を今もって手にすることができ、それが関東学院課外活動の糧の一部にあてることができる幸せは、やはり運命的なものなのだろう。大人こそ読んでほしい本と称えられる度に、人生で大切なことが見えなくなっているという現世に、身がすくむ思いがする。

創立100周年からの20年

総務部長 江口 欣宏

この20年

今年、学院は創立120周年を迎えた。1984(昭和59)年に新しい釜利谷校地で創立100周年を祝い、第二世紀を歩むに際して目標を確認しあい、次の発展への決意を新たにすることを思い出す。それからの20年は18歳人口の急増急減期にあたる。1986(昭和61)年の期間を付して入学定員を増加することに始まる「大学バブル期」から、2007(平成19)年には大学及び短大の志願者数と入学者数が同数になる「大学全入期」へと移行する激動の時代とほぼ重なる。

この時期に学院は、小田原校地を取得し、法学部を設置して、大学院修士課程及び博士後期課程を次々と増設している。1991(平成3)年度大学入試では総志願者数が42,978名を記録したこともある。国際交流では「オックスフォード大学マンスフィールド・カレッジとの学術研究教育交流協定」を締結し、課外活動では大学ラグビー部の全国制覇や中高マーチングバンドの全国グランプリ受賞等目覚ましい活躍を遂げている。地域社会との交流では、各方面でのボランティア活動を展開するとともに、「大学ふれあい祭り」を成功させている。最近では、女子短期大学改組に伴う人間環境学部の設置、法科大学院の設置、工学部の改組や大学表面工学研究所の設立、六浦第2校地及びKGU 関内メディアセンターを取得するなど、様々な諸課題に対応しながら教育組織及び施設・設備の拡充に邁進してきている。

この間に事務組織の基礎となる職員部課長連絡会議規程や職員人事規程等の重要な諸規程を制定している。とくに職員人事小委員会の発足により、勤務条件や処遇等の学院一元化が図られ、学校間の人事異動を可能にした。その後の職位制度及び昇格試験制度の導入は、役職任用や年齢構成等に対応して一定の成果を上げてきた。なお業務改善推進委員会は、学院事務組織の諸問題を総括的に検討する役割を果たしてきている。また教職員厚生会の大幅な改革を行い、非加入の両小・両中高の教職員を加えるなど、学院全体の福利厚生制度を整備したのもこの頃である。

学院構造改革の射程

本学院の中期的戦略「関東学院構造改革大綱」は、2000(平成12)年を境に8年間を射程に策定して

いる。21世紀を目前にして、教育と研究をめぐる環境の変化を予測し、果たすべき課題や必要な条件整備を見据えつつ財政改革、機構改革、雇用改革、意識改革の4つの提言を掲げている。そして、改革の目標年次として第一次改革を1999(平成11)年度末とし、第二次改革を2004(平成16)年度末と定めている。これまで学院はこの中期的戦略に基づき数々の改革を進めてきた。本年度はその完成年度に当たる。

これまでの事務機構改革

業務改善推進委員会は、1994(平成6)年に電算化による事務効率の向上を図るため業務電算化推進委員会を、また2000(平成12)年には女子短大及び大学の事務組織を統合するための事務機構検討小委員会を設置し、各々の答申に基づき職制及び同別表等の改正を実施してきた。とくに2002(平成14)年の「会計検査院実地検査」はまだ記憶に新しい。この最も厳しい第三者評価の審査で事務局はいわゆる「適合マーク」を頂いている。これは縦系列の組織的・系統的な運営と横断的な横系列のワーキング・グループによる短期的・集中的な取り組みが相乗効果を発揮したもので、今後の事務組織のあり方を示唆するものである。

この実地検査が職員に自信を与えたことに注目し、職員研修委員会はそれまでに寄せられた多くの意見や提案等をもとに、職員研修会の運営を実行委員会方式に移行すること、研修参加者からの個別的な提言・提案を組織的な企画・立案へと進展させること、また形式的な勤続年数別研修から実際の目的別業務研修へ脱皮することを促してきた。この研修会の取り組みが、事務機構改革等の必要性を認識する場となり、学院の経営管理への参加を自覚する機会になることを期待している。

今回の事務機構改革

業務改善推進委員会は、学院構造改革の一つである「機構改革」のうち、事務機構の一層の改革が重要であるとの認識を深め、2002(平成14)年11月新たに事務機構検討小委員会を設置した。その際、学院が置かれている実情を踏まえ3点の諮問事項を提示した。1つは、新しい時代に対応した効



改版を重ねる「規程集」

率的な事務機構を構築すること、2つには大学1号館新棟建設に伴う事務室を再配置すること、3つにはキャンパス毎の事務体制のあり方について具体的改革案を作成することである。なお、検討に当たって学生サービスに係る総合的な部署の設置、横断的な組織形態の検討、専任職員数が2002(平成14)年4月現在を上回らないこと等の留意事項8項目を補足した。

同小委員会は、本学院が置かれた内外情勢の厳しい事態に対する危機意識もあり、1年近くにわたる活発な討議を重ね、2003(平成15)年9月「事務機構改革について(最終答申)」を取り纏めた。同答申は、学生本位の大学づくりを支援し、連絡調整機関から企画立案のできる事務組織を構築すること、組織の肥大化・細分化を抑制する等、8項目の基本方針を定め、学院事務組織の全般にわたって業務内容を詳細に検討し、職制の事務分掌及び組織図について具体的改革案を提案している。最終目標は学校法人関東学院事務局として事務組織を統合し、未だ実現を見ない職員代表の学院事務局長を置くことであるが、これについては学校法人と教学組織との旧くて新しい問題とも係わることであり、中高以下の事務組織を含め今後継続して検討することとした。

同推進委員会は、まず答申の内容を事務組織の新設、廃止、統合、名称変更等の7分野に分類し、具体的提案事項を62項目に整理した。そして第一段階として、早期の実施が可能な新設6、廃止2、名称変更8、統合移管4、担当配置2の22項目について実施することとし、2004(平成16)年4月付けで職制及び同別表を改正した。併せて職員人事異動を発令した。新たな部署として広報課友係、学生生活課学生支援係、産官学連携担当、法科大学院庶務課、KGU 関内メディアセンター事務室等が含まれる。第二段階としては、提案事項のうちの比較的重要な項目について、さらに慎重を期し、引き続き検討を重ねた上で、2005(平成17)年度を目途に改革を進めることにしている。

金沢八景キャンパスにおける事務室等の再配置

1999(平成11)年10月大学設立50周年記念式典が開催され、その記念事業として建設された「フォーサイト21」は、21世紀における大学教育の象徴的な施設として期待された。一方、築34年を経て老朽化が進んだ旧1号館は、大学の発展と学園紛争期の様々な思いとともに解体され、事務部署も一時フォーサイト21に仮移転した。2003(平成15)年12月には旧1号館

跡地に新しい1号館が落成し、仮移転していた事務室を冬期休業中に再移転した。その際2号館(旧称新1号館)の管理部署を1号館に移し、法人事務局と教学事務組織との一体的運営の可能性を模索することとした。1号館は管理事務棟としての機能を与えられ、職員の積年の願いがここに実現した。これにより「学生本位の大学」形成の一環として事務組織サイドの学生サービス体制が整うことになり、今回の事務機構改革の課題の一つを達成した。2号館は改築され、主に2004(平成16)年4月に開設した法科大学院の諸施設として使用している。

「冬の時代」の到来

近年、少子高齢化や国の規制改革という大きな流れの中で、広範囲にわたる教育制度の改編が進められ、私立学校法の改正等私学のあり方についても見直しを迫られている。多くの教育機関が第三者機関から評価され、査定され、選別される。私立大学は国立大学法人も加わり、厳しい大学間の競争的な環境にさらされている。国内のみでなくアジアを含む世界の大学とも対抗しなければならない。実績のある大学はワールドクラスの大学を目指しているという。「選別」は世界的でもある。本学院もその渦の中にあり例外ではありえない。

来るぞ、来るぞと言われて久しいが、ついに大学「冬の時代」の到来である。大学の改革は量から質へ、周辺整備から教育・研究の高度化へと進み、教師と学生を中心とした「教育の創造」という本来の中身を問い始めている。創立120年の歴史が、結果として「どのようなデザインであったか」は振り返ってみれば分ることであるが、これから「どのようなデザインにするか」は、やはり地道に中期的な計画を積み上げて行く以外の近道はないのかも知れない。横浜バプテスト神学校初代校長 A. A. ベネットは「汝の最も身近にある義務を果せ」と教職員に語りかける。いま職員に求められているのは、学院の歴史と伝統の定着化を図り、拡充する組織とその継続性の維持であり、また学院内に浸透する総合的支援力の確実性である。願わくは時代に即応する卓越した企画性を高め、次ぎの発展への革新性を磨くことなのではないか。まず事務組織を含めた学院全体の陣容を厳しく見極め、急ぎ陣立てを整えて、事に備えることが肝要である。とても武者震いするような余裕はないが、まだ萎縮するほどの事態でもない。ただ優しげな「ソナタ」に浸っている場合でないことは確かである。

関東学院の120年——回顧と所感

学院宗教主任・経済学部教授 高野 進

☆関東学院として、旧約聖書に見られる「ヨベルの年」にちなんで、50年を単位に記念祭を行うか、同じく旧新約聖書に見られる12や、40を単位に考えて、記念祭を行うかは、それぞれの事情や立場から、選び方が異なるのかもしれない。問題は、単に記念祭行事を開催するか、しないかではない。このような時の節目を利用して、そして実はいつも、学院の運営と教育において、建学の原点に忠実かどうかを、自己検証することが、たえず求められているわけである。今年の創立記念日は、昨年に続いて大学は授業日となった。しかし当日、建学の精神の今日的意味を問うシンポジウムが行われた。各学校でも、創立記念日の週に礼拝の時間などで、学院の歴史を顧み、その存在の意味を考えることになっていた。これらは学院の使命の自己検証活動の一環として高く評価したい。

☆今年、久しぶりに三春台のテンネー礼拝堂で創立記念祈禱会と式典が開かれた。C. B. テンネー博士は、1919(大正8)年に三春台に中学関東学院を開設した時の理事長として、坂田祐学院長を支えた。同時に、その前身であるバプテスト神学校校長、東京学院理事長をつとめられた。先生は東京学院の旧制専門学校(今日の大学)を関東学院に併合せ、今日の発展のために道を開いた。その間、世界大恐慌、関東大震災を経験している。先生には心労がつかることがなかったが、ご自分の使命とした関東学院の教育のために、日夜心血を注がれた。残念ながら、先生は病のために、志半ばで帰国され、静養の甲斐なく亡くなられた。



中学校本館入口。記念式当日(10月9日)は台風に見舞われた。



中学校本館内のテンネー礼拝堂にて。(祈禱会より)

横浜外国人墓地には、出産の時に亡くなられた奥様とお子様のお墓がある。ご自身はニューヨーク州西部の出身地に眠られておられる。数年前、そこを訪ねた時、私は深く心を動かされた。先生の墓は質素だが、きれいに管理・維持されていた。昼下がりの郊外の墓には、人影がなかったので、その土地の人と言葉を交わすことができなかった。しかし60余年後の今も、関係者が先生の日本における働きを誇りとして、これを守っておられるのであろう。たまたま本年春に完成した大学の新しい建物のファサードに、先生の言葉がデザイン化されて掲げられている。しかも数100回も繰り返されている。先生は建学の精神を決して忘れてはならない、と今も語られているようである。

☆この120年における学院の変遷の中で、いくつかの学校が生まれ、そして姿を消していった。その一部は、形を変えて今も残っているものもあれば、まったく忘れ去られてしまったものもある。昼に働いて、夜に学びたいという人々のためには、横浜山手の神学校跡にあったデーリング・スクール、関東学院英語学校、関東学院商工高等学校、関東学院定時制高校などがあつた。それらは関東学院の使命を、社会のためにもっとも忠実に遂行してきた例でもある。「改革」の大義名分のもと、利益の上がらないところは切り捨てようとする企業の理論が学校に優先するとき、教育は荒廃する。「人になれ、奉仕せよ」は、できるかぎり多くの小さな子供たちが、人間としてよりよき成長を遂げるために、学院として奉仕する教育を意味している。幼な子のもっともやわらかなところに植えつけられたよきものは、やがて必ず実を結ぶ。そのような教育を担う両幼稚園や、両小学校の存在は学院の教育にとってまことに重要であり、今や、もっとも建学の精神を具現するにふさわしいところである。パウロの思想によれば、「からだ」はひとつであるが、多くの肢体からなる。目は手に向かって、「おまえはいらない」とは言えない。頭は足に向かって、「おまえはいらない」とは言えない。「もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ」という。このような一致と支え合う態勢ができるとき、はじめて「人になれ、奉仕せよ」が真に生かされたことになる。またすべての年齢層に奉仕する成熟した関東学院の存在の意義の証明ともなるであろう。

関東学院略年表 (1984年以降)

・建物等の名称は当時のまま。
・記事事項の大部分は関東学院広報に準拠。

年 月 日	こ と が ら
1984年10月6日	昭和59 関東学院創立100周年記念式典及び祝賀会を釜利谷校地で挙行
1985年4月1日	昭和60 女子短大 家政科に生活文化専攻を増設
1985年6月5日	昭和60 大学 工学総合研究所設立10周年記念講演会
1986年7月1日	昭和61 (釜利谷校地) 大学教室棟献堂式
1986年10月6日	昭和61 (釜利谷校地) 釜利谷校地開校式・祝賀会
1987年3月31日	昭和62 女子短大 教室棟(5号館)献堂式
1987年4月1日	昭和62 女子短大 経営情報科を開設
1987年4月11日	昭和62 女子短大 関東学院女子教育40周年記念式典ならびに女子短期大学チャペル落成披露(於:女子短大チャペル) 経営情報科新設ならびに関東学院女子教育40周年記念祝賀会(於:横浜国際ホテル)
1988年5月6日	昭和63 女子短大 陶芸教室棟(7号館)献堂式
1988年6月10日	昭和63 「関東学院」並びに「関東学院大学」釜利谷校地校名碑除幕式
1988年7月2日	昭和63 付属幼稚園 創立40周年記念おひふ祭
1988年7月30日	昭和63 女子短大 栄養士養成課程設置20周年記念の集い
1988年10月1日	昭和63 付属幼稚園 女子短期大学付属幼稚園創立40周年記念式(於:女子短大チャペル)
1988年12月2日	昭和63 大学 大沢記念建築設備工学研究所創設20周年記念会
1989年10月26日	平成元 大学 大学礼拝堂献堂式
1990年6月14日	平成2 大学 坂田記念館献堂式
1991年2月16日	平成3 六浦小学校 創立40周年記念体育館・礼拝堂献堂式
1991年3月25日	平成3 大学 小田原校地献堂式
1991年4月1日	平成3 大学 小田原校地に法学部(法律学科)を開設
1991年5月15日	平成3 大学 法学部開校式
1992年2月	平成4 中高 中学校本館が「横浜市歴史的建造物」に指定される
1992年2月22日	平成4 女子短大 経営情報科開設5周年記念の集い
1992年3月25日	平成4 大学 12号館(厚生棟)献堂式
1992年7月2日	平成4 大学 経済学館献堂式
1992年10月31日	平成4 小学校 創立40周年記念礼拝(於:中高大講堂)
1993年4月1日	平成5 大学 大学院文学研究科修士課程(英語英米文学専攻)を開設
1993年6月26日	平成5 女子短大 幼児教育科開設20周年記念会(於:女子短大チャペル)
1993年7月14日	平成5 六浦中高 1号館献堂式
1993年11月15日	平成5 中高 六浦ガーデン奉献式(経済学館南側)
1993年11月20日	平成5 中高 定時制創立40周年記念礼拝
1993年11月20日	平成5 六浦中高 定時制創立40周年記念レセプション(於:東急ホテル)
1994年4月1日	平成6 大学 40周年記念式 大学院経済学研究科修士課程(経営学専攻)を開設 専攻科食物栄養専攻を開設
1994年8月1日	平成6 大学 新10号館献堂式(Science Culture Center)
1995年4月1日	平成7 大学 大学院文学研究科修士課程(社会学専攻)を開設 大学院工学研究科博士後期課程(工業化学専攻)を開設 大学院法学研究科修士課程(法律学専攻)を開設
1995年9月4日	平成7 中高 高等学校本館献堂式(撤櫃会寄贈によるカリオンベルを設置)
1995年10月6日	平成7 学校法人関東学院とオックスフォード大学マンスフィールド・カレッジの学術研究・教育交流協定調印式(於:大学 SCC ベネットホール)
1996年4月1日	平成8 大学 大学院文学研究科博士後期課程(英語英米文学専攻)を開設 大学院経済研究科博士後期課程(経営学専攻)を開設
1996年4月9日	平成8 大学 小田原校地第二期整備事業第一次工事献堂式
1996年6月1日	平成8 女子短大 女子教育50周年記念式典及び記念音楽会(於:短大チャペル)
1996年10月19日	平成8 女子短大 国文科創設30周年記念の集い(於:女子短大チャペル)
1997年4月1日	平成9 大学 大学院文学研究科博士後期課程(社会学専攻)を開設 大学院法学研究科博士後期課程(法律学専攻)を開設 大学院工学研究科博士後期課程(電気工学専攻)を開設
1997年4月5日	平成9 大学 小田原校地リカレント教育棟献堂式
1997年8月25日	平成9 小学校 校舎献堂式
1997年9月11日	平成9 大学 小田原エクステンション・センター開所式
1999年1月27日	平成11 中高 中学校・高等学校創立80周年記念礼拝
1999年4月1日	平成11 大学 大学院経済研究科博士後期課程(経営学専攻)を開設
1999年6月26日	平成11 大学 経済学部創設50周年記念祝賀会(於:大学 SCC ベネットホール、12号館)
1999年8月27日	平成11 六浦小学校 1号館献堂式
1999年10月9日	平成11 大学 大学設立50周年記念式典、記念講演会及び祝賀会(於:横浜プリンスホテル)
1999年11月6日	平成11 中高 創立80周年記念式典挙行
1999年11月20日	平成11 大学 機械工学科設立50周年記念式典・祝賀会(於:バンパシフィックホテル横浜)
2000年2月26日	平成12 六浦小学校 六浦小学校創立50周年記念式典
2000年10月6日	平成12 大学 大学学生健康管理センター・小講堂献堂式(於:釜利谷校地)
2000年10月10日	平成12 大学 クレメント教授母堂、タフト教授夫人墓地修復披露式(於:青山霊園) テンネー博士顕彰銘板完成披露式(於:横浜外国人墓地)
2001年6月23日	平成13 大学 法学部開設10周年記念式典・祝賀会(於:箱根「湯本富士屋ホテル」)
2001年10月6日	平成13 大学 「フォーサイト21」献堂式・完成披露式
2001年10月13日	平成13 「キリスト教と文化研究所」開所記念式典・講演会・祝賀会(於:大学礼拝堂、フォーサイト21)
2002年4月1日	平成14 大学 人間環境学部を開設 文学部比較文化学科、法学部法政策学科を開設
2002年4月4日	平成14 大学 「人間環境学部新棟」献堂式
2002年5月18日	平成14 大学 人間環境学部開設記念式典・祝賀会(於:5号館チャペル、人間環境学部新棟エテルニテ)
2002年7月5日	平成14 大学 大学図書館釜利谷分館献堂式
2002年7月24日	平成14 大学 有限会社「関東学院大学表面工学研究所」を設立(学校法人関東学院と関東化成工業がそれぞれ出資)
2003年4月1日	平成15 幼稚園 女子短期大学付属幼稚園を六浦幼稚園に園名変更
2003年7月3日	平成15 大学 小田原校地第2厚生棟オープニング
2003年10月25日	平成15 大学 大学院文学研究科10周年記念式典(於:横浜エクセルホテル東急)
2003年11月15日	平成15 六浦中高 六浦中高創立50周年記念式(於:六浦中高礼拝堂)
2004年3月26日	平成16 大学 大澤記念建築設備工学研究所創設35周年記念公開学術シンポジウム(於:大学 SCC ベネットホール)
2004年4月1日	平成16 大学 大学1号館・2号館オープニング(金沢八景キャンパス)
2004年4月1日	平成16 大学 大学院法務研究科(実務法学専攻)を開設 工学部情報ネット・メディア工学科を開設
2004年7月6日	平成16 大学 「金沢八景キャンパスクラブハウス棟」オープニング
2004年10月9日	平成16 大学 創立120周年記念式典(於:中学校テンネー礼拝堂)

▶ オール関東学院フェアの開催について ◀

常務理事 津田 宏之

2004(平成16)年10月6日は、本学院創設120周年記念日でした。記念式典は10月9日台風接近の中、中学高等学校テンネー礼拝堂で挙行されました。10月6日を含む4日(月)から9日(土)までを学院創立記念週間として位置づけ、初めての試みとして「オール関東学院フェア」を実施いたしました。これは松本昌子学院長を座長とする各校責任者、学院宗教主任および常務理事による「学院一貫教育検討会議」の中から生まれたものです。このフェア開催の経緯と意義についてご報告いたします。

(1) 「学院一貫教育検討会議」開催の経緯

第774回常任理事会(2003年2月27日)において「学院一貫教育検討会議」の設置を審議し、同日の第372回理事会で承認されました。検討会議(第1次メンバー:学院長・幼稚園長・小学校長・学院宗教主任・常務理事)では初等教育問題(幼稚園・小学校)を取り上げました。ここでの検討結果を常任理事会に報告するとともに、さらに継続的に審議するため第2次の検討会議が設置されました。第2次の会議では初等教育から高等教育までを含み、第1次のメンバーに両中高校長・大学長が加わりました。この2次にわたる、通算12回の検討会議の結果を踏まえて、第394回理事会において「関東学院一貫教育検討会議規程」の制定が承認されました。この規程では、第3条に「(1) 本法人各校に共通する教育・研究及び行事に関する事項、(2) 本法人の特定の学校間に共通する教育・研究及び行事に関する事項、(3) その他理事長から諮問された事項」を検討事項としています。これにより学院長を議長として各校責任者が一同に会して、恒常的に検討する機関が設置されました。これまで、各校の責任者が会する会議体としては、「校長会議【職制第36条(2)】」がありますが、その役割は明確ではありませんでした。今回の「関東学院一貫教育検討会議規程」の制定によって、学院各校が一貫教育の観点から共通する教育課題に取り組む会議体としての役割が明確になりました。

(2) 作業部会の設置とフェア開催準備組織

前述の会議規程に基づき、第822回常任理事会において一貫教育検討会議の下に2つの部会設置と「オール関東学院フェア開催」の承認をいただきました。7月17日、KGU 関内メディアセンターに2つの部会委員が集り、フェア開催の準備に入りました。この2つの部会は、「関東学院総合教育相談室(仮称)の設置(第1部会長、伊藤賀永大学カウンセリングセンター所長)」と「関東学院入試進学相談会(仮称)の開催(第2部会長、瀬沼達也法人広報課長)」です。各部会の委員は各校責任者から推薦された方々です。事務局は法人企画調査課が所管し、総務課と大学のKGU 関内メディアセンターが加わっています。第1部会は「学院各校の教育交流と各種教育相談窓口の設置に向けての提案」を、第2部会は「学院各校の入試・進学に関する毎年の相談会開催の内容についての提案」を検討課題としています。そして各委員には創立記念週間の「オール関東学院フェア」開催の実行委員として活動していただきました。開催日まであまり準備期間が無い中、部会の合同委員会を3回と事務局メンバーによる数回の打ち合わせ、各校・関係各位の精力的な奉仕のもとフェア開催を果たすことができました。

(3) フェア開催内容

フェア開催の目的は、「横浜に生まれて120年・関東学院」を合言葉として、創立120年の歴史と伝統ある総合学園に発展してきた学院各校の一体感を共有し、学院の存在と新しく開設したKGU 関内メディアセンターのお披露目を果たすものです。

10月4日(月)～9日(土)は、学院各校の紹介パネル展示【会場:横浜メディア・ビジネスセンター(YMBC) 1階プラザ】を行いました。この会場は、平日はレストランとして使われており、そのガラス壁面を利用してパネル展示をしたものです。六浦小と大学によるタイのボランティア活動、大学の昌子住江研究室の「追浜こみゆにてい」と表



学院各校の紹介パネル展示風景(上・下)

面工学研究所からご参加いただきました。8階のラウンジでは大学図書館の協力で、聖書の貴重本展示も行いました。

一連の特別講演会【会場:KGU 関内メディアセンター】は同窓生や近隣の社会人を対象とし、「教育・歴史・街づくり・文化」の視点からもう一度「都市・横浜」を見直し、横浜を新しい文化の発信基地として再生させるため、このセンターが都市の学習拠点として社会貢献を果たすことを意図したものです。

初回の4日は、教育の視点から、「21世紀型大学都市」と題して宝田良一氏(公立法人横浜市立大学理事長予定者・合資会社宝田商店代表社員・横浜市教育委員)による講演を開催しました。氏は『21世紀に日本の繁栄を続けていく為の人材育成の役割を大学が担っていることを考えると都市に於ける大学のアイデンティティーが今まで以上に重要になってくる。それぞれの大学が幅広い教養と高い専門的能力を持つ為の教育に重点を置かなければならない。』とし、宝田氏の留学経験で培われた広い人脈とグローバルな視点を披瀝され、国際感覚を持った人材育成を外国からではなく横浜の地から輩出する抱負を語ってくれました。そして、関東学院が横浜の中心地にKGU 関内メディアセンターを開設したことを高く評価されました。

2回目の6日には、歴史の視点から「横浜開港

史異聞—公園・テニス・ヒマラヤスギ—」と題して鳴海正泰氏(本学名誉教授・横浜地方自治体研究センター理事長・横浜山手テニス発祥記念館館長)を迎えました。今年、文化財「名勝」に指定された山手公園を舞台に、ヒマラヤスギに夢をのせて、山手居留地で始まるわが国初の洋式公園とローンテニスのお話し、そして山手公園は日本吹奏楽発祥の地でもあったこと、このような「横浜ものはじめ秘話」を語ってくれました。話の締め、関東学院三春台校地の校舎とヒマラヤスギの存在に触れられました。

3回目の7日は、街づくりシンポジウム「クリエイティブシティヨコハマへ向けて—横浜の都市と建築」と題して、4人のパネリストの報告と討論を通して、横浜都心部の再生問題を考える企画でした。パネリストの小沢朗氏(横浜市都市デザイン室長)は文化芸術による都市の個性発揮、都心部の活性化を目指した横浜市の政策目標に基づく考え方を事例と写真で紹介されました。水沼淑子氏(本学人間環境学部教授・横浜市歴史的景観保全委員会委員)は歴史的建造物の活用の方と都心部の活性化について豊富な事例で紹介し、学院の三春台校舎が市の歴史的建造物に指定されている唯一の教育施設であることの歴史的価値を語られました。湯澤正信氏(本学工学部教授・建築家)には横浜関内地区の地域特性の分析からコンバージョンによる都心部の活用など、過去に氏が計画提案した都市計画・建築のプロジェクトを紹介されました。パネリストの一人として参加した筆者は、本学を始めとして市内の大学が横浜都心部に相次いでサテライト教室を開設したことを紹介し、これらの教育施設が果たす役割について、「学習創造都市」として、社会人の生涯学習教育に応える大学街づくり論を提案しました。これらの司会を鈴木伸治氏(本学工学部助教授・都市計画)が絶妙の交通整理役を務めて議論を進められました。

4回目の8日は、文化の視点から「オデロン座から原節子まで—横浜が生んだ映画人と映画たち」と題して、服部宏氏(神奈川新聞記者・前文化部長)に講演をお願いしました。明治時代に開館した伊勢佐木町のオデロン座は洋画封切館として全国に知られていました。また横浜には大正時代には撮影所があり、「天国と地獄」をはじめ、多くの映画の舞台にもなったそうです。大女優原



服部宏氏による講演会

節子と岸恵子の存在など、映画史上横浜が果たした役割は大きいものがあることを紹介されました。このように映画文化の視点から横浜を見つめてきた氏の映画に懸ける強い想いの伝わるご講演でした。

9日(土)はあいにく台風の直撃を受けることが確実になったため、予定していた行事は全て中止せざるを得なくなりました。この日は5回目最後の特別講演「横浜と宣教師たち」と題して、本学元教授・大島良雄先生をお願いしておりました。横浜山手の地に120年前横浜バプテスト神学校が開設され、これが学院のルーツとなっているところから、創立120年記念週間の最後を締めくくりにふさわしい講演と位置づけておりました。また、午前中は三春台中高で記念祈祷会・記念式典・レセプションが開催されていまして、参加者をチャーターしたバスでメディアセンター会場へお越しいただく手はずでした。YMBC1階プラザでは、学院各校の児童・生徒学生たちによるコンサート他の楽しい催しが予定されており、小学校・鼓笛隊、六小・合唱団とリコーダ演奏、中学高校・ハンドベル、六中高・吹奏楽、大学・シェイクスピア英語劇と管弦楽団が各々準備をしてきました。そしてこの司会には、TVKのラグビー放送で著名な森田浩康氏をお願いしておりました。また、同じ会場では、各校の教職員による教育進学相談

コーナーを、8階の会場では両幼稚園教諭・各校カウンセラーによる「子育て・教育相談」を予定していましたが、これらは全て中止といたしました。

(4) 結びにかえて

以上が今回のフェア開催の全貌です。メインイベントを用意していた最終日が中止となってしまう、準備してきた子供さんたち、楽しみにしていた在校生、ご父母の皆様、卒業生や地域の方々には大変に残念な結果となってしまいました。しかしながら、一週間にわたって展示できた学院各校の紹介パネルや開催できた4回の特別講演会、そしてこのフェア開催に当たって学院各校の皆様が一致協力して推進していただいたこと、同窓会はじめ学内外の数々のご協力者との連携等、学院へ賜りましたご奉仕は何ものにも変えられない財産となりました。これにより学院の総合教育力がさらに生まれ、一貫教育の実が結ぶよう感謝の祈りをささげたいと思います。この欄をお借りして、ご奉仕いただいた全ての方々へ御礼申し上げます。



会場で配布されたパンフレットの表紙

資料・情報提供のお願い

学院史資料室は学院に関する資料の収集をしています。

各学校、各部署等で発行されました刊行物は一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようお願いいたします。(瀬沼・菊池・岡崎)

『関東学院百年史』 1984(昭和59)年

まずこの『百年史』の内容を目次から紹介しよう。序章では、明治期の教育体制の近代化とキリスト教教育の展開が記述されている。第1～3章では、アメリカ・プロテスタントによる日本宣教、アメリカ・バプテスト教会による先駆的活動が描かれている。ここまでは、いわば関東学院百年史の「前史」の部分である。

次に第4、5章に入って、日本におけるバプテスト派の神学専門教育、その前期となるはずの普通教育、高等教育の成立と発展が扱われている。

第6～9章では、「中学関東学院」が、横浜市南区三春台に開設され、やがて東京学院の高等学部と神学部が合流して、「関東学院」となった経過がたどられている。学院にとっても波乱の時代であった。

第10章は、戦後の焼け跡からの関東学院大学の発足、第11章は関東学院女子短期大学の発足が扱われている。

第12～14章では、関東学院中学校、高等学校、同六浦中学校、高等学校、同商工高等学校、英語学校の再発足とその後の経過が記述されている。

第15章では、関東学院小学校、同六浦小学校、関東学院幼稚園、同野庭幼稚園の発足とその後の経過が描かれている。

終章では、年表、資料一覧などが見られる。

これは、1984(昭和59)年に行われた関東学院開学百周年記念事業の一つとして、まとめられて、刊行されたものである。千ページを超える部厚な書籍である。

今日、日本のキリスト教学校には創立百年を越えるところが多くなってきた。明治期の近代的学校教育制度の施行から数えても、百三十余年となる。わが学院はもともとアメリカ・バプテスト派が設立母体であり、



この団体と深い結びつきを持っている。アメリカ・バプテストは1873(明治6)年にネイサン・ブラウンとジョナサン・ゴープルによって横浜山手に宣教を開始した。女子教育は、N.ブラウン夫人による教育がやがて学校法人捜真学院へと発展した。男子教育を中心とした本学院の流れとしては、A.A.ベンネット博士による神学校が源流であり、メインラインとしてあり、東京学院と関東学院がその教育に広がりを持たせて、今日に至ったと言える。

本書をまとめるのに、約20年を費やしたとされる。この大著はたしかに「偉業」である。ただし、詳細に見る時、個人的な言及や感傷が見られる。その他、誤記、誤解も指摘されている。前史の部分及び各校の執筆者の記述について、校閲・監修が十分に行われたと言えない。かつて神学用語辞典を編集した高名なG.フリートリヒ教授は、地図や辞書が不完全であっても、ないよりはましである、と謙虚に語ったことがある。同様に、本書は学院史の全体と各校の歴史を概観するためにはなくてはならないものであることは事実である。

さて『百年史』が完成して20年が経過した。その間、新たな史料も見出されている。地味な資料(史料)収集と吟味を続けなければならない。

『三緑 関東学院商工高等学校33年の歩み』

1973(昭和48)年

学院の昔を知る方から、かつて存在した関東学院商工高等学校についても、掘り起こして書いていただきたい、との要望が何度かあった。その貴重な史料がこの冊子である。「昭和十五年四月、横浜市南区三春台の関東学院内に勤労青少年のための夜間甲種の商業学校として、発足したわが校も、三十三年にわたる歩みを、この三月をもって終え、休校することになりました。」と最後の校長の岩楯幸雄先生が記しておられる。1973(昭和48)年になる。この学校が最後の仕事として本書をまとめ、出版している。

最初の頁に、坂田祐先生の写真と校訓「人になれ 奉仕せよ」が掲載されている。次頁には、歴代校長の四人の先生方の写真が掲載されている。歴任順に紹介すると、白山源三郎先生、中居京先生、秋葉隆吉先生、岩楯幸雄先生である。

どうして『三緑』という書名にしたかについては、同窓会が「三緑会」であること、「これからは卒業生だけの学校となりますので」、その二字をもって書名としたという。消滅する学校に属する人々の深い思いがにじみ出ている。岩楯幸雄先生は最後の卒業式式辞において、戦中から戦後にわたるこの学校の沿革をたどっている。次に卒業生に「校訓で表現されている高邁な教育理念を一人一人がよく思い起こして、それぞ



れの働きの場でそれを実践発揚することによって、この学校の存在した意義を表してゆかねばならないものと思えます。」と悲願を述べられた。

本書には、その他にこの学校にかかわった多くの先生方と卒業生の言葉が、掲載されている。その中で特に中居京先生の「商工時代を顧みて」は関東学院史の貴重な証言史料である。その先生の残された思い出の一部を紹介しよう。

「働きながら学ぶ楽しみを覚え、生徒はそれを感じていた。」大雪の日にも「八十名の生徒が一キロ、二キロの道を遠しとせず、登校したので、皆勤賞、精勤賞を始めた。」

また先生は、ほとんどの生徒が勤務先から空腹のまま登校するので、粉ミルクや、パンの調達をした。授業を担当した先生方についても「毎夜熱心に教えておられる姿を覗き見して、全然その道に無知であった私

が、どんなに助けられ、励まされたかを思い出して感謝に堪えない。」と先生は記している。関東学院商工高等学校の背後には、このような校訓のひたむきな実践があった。どの学校においても、そのような実践の灯火は消されてはならない。